

J-STAGE NEWS

J-STAGE ニュース

No. 41

電子ジャーナルの最新情報をおとどけるJ-STAGE機関紙

J-STAGE
20th

Online ISSN:2434-4311

2019年7月12日発行

国立研究開発法人
科学技術振興機構

今号の記事

- ◆ J-STAGE 利用規約の改定について
- ◆ 【2018年度 第3回 J-STAGE セミナー報告】 ～ジャーナルコンサルティング事例紹介～
- ◆ 【シリーズ学会訪問】 ～日本細胞生物学会～
- ◆ 【シリーズ学会訪問】 ～日本動脈硬化学会～
- ◆ J-STAGE 利用者インタビュー 「神田外語大学附属図書館」
- ◆ WSIS Forum 2019 参加報告
- ◆ 【来訪者紹介】 figshare、AIP Publishing、紀伊國屋書店
- ◆ 【2019年度 第1回 J-STAGE セミナー報告】 ～国際動向への対応：オープンアクセス(Plan S)～
- ◆ ご存じですか？ J-STAGE おすすめ機能紹介

J-STAGE 利用規約の改定について

2019年5月10日に科学技術情報発信・流通総合システム利用規約（発行機関向け）を改定しました。主な改定内容を以下に示します。

- **（定義）第2条** 「オープンアクセス」を「インターネット上に論文等を無料公開し、二次的利用の範囲に関するライセンス情報を明記することで、誰もが障壁なくアクセスできることをいう」に、また、「ライセンス情報」を「科学技術刊行物の記事に付されている利用条件を表す情報(クリエイティブ・コモンズ・ライセンス等)をいう」と明確化しました。
- **（利用申請）第3条** J-STAGE はオープンアクセスの推進に寄与する観点から、利用申請の条件に「オープンアクセスの実現に積極的に取り組めること」を追加しました。
- **（掲載データの著作権）第9条** 電子アーカイブ制作物の複製物の提供に際しては、「機構（JST）と利用機関で協議のうえ書面による合意を行うものとする」ことを追加しました。
- **（掲載データの利用許諾）第10条** これまで、利用機関がJ-STAGEの利用を停止した後において、JSTは引き続き当該利用機関にかかる掲載データについて利用を継続できると記載していましたが、「J-STAGEでの公開についても継続できること」を明確化しました。

そのほか、改定の詳細は「J-STAGE 利用規約改定 新旧対照表」 (https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_riyoku_kiyakushinkyutaishouhyou_190510.pdf) をご参照ください。

利用機関におかれましては、趣旨をご理解のうえ、引き続きJ-STAGE利用規約の順守をよろしくお願いいたします。





【2018年度 第3回 J-STAGE セミナー報告】 ～ジャーナルコンサルティング事例紹介～

J-STAGE では「ジャーナルのプレゼンス向上に向けて」とテーマを定め、研究者から信頼されるジャーナルとして求められる要件や、発行機関からの情報発信のあり方などに関する知見・情報の提供を目的として、2018年度にJ-STAGE セミナーを3回開催しました。

2019年3月に開催した2018年度 第3回 J-STAGE セミナーは「実践事例の紹介」をサブテーマに行いました。パイロットプロジェクトとして実施しているジャーナルコンサルティング（以下、ジャーナルコンサル）に参加した発行機関から、機関内での議論の変遷も交え質向上に向けた取り組み等について発表していただきました。またコンサルティングを担当した INLEXIO 社には、ジャーナルを取り巻く最新動向と、2018年度の総括をしていただきました。

第3回 J-STAGE セミナーのプログラムを以下に示し、プログラムの概略と当日の質疑応答を紹介します。プログラムの詳細は各 URL を参照ください。

<プログラム>

(1) J-STAGE ジャーナルコンサルティング ～J-STAGE 登載誌の質向上に向けて～/JST

J-STAGE 登載誌の質の向上に向けた取り組みと 2017・2018 年度のコンサルティングの実施内容、および 2019 年度の予定を紹介。https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar01.pdf

(2) Journal development and recent trends in scholarly publishing / INLEXIO 社 Dugald McGlashan 氏

ジャーナルを取り巻く最新動向と、質の向上に向け意識すべき点を解説。これまでのジャーナルコンサルを振り返り、日本の学協会へのアドバイスも紹介。https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar02.pdf

McGlashan 氏から、日本の学協会へアドバイス

◆ジャーナルの質の向上に対して必要な指標は何でしょうか。

学協会の意見、コンサルタントの意見、著者の満足度、投稿論文数、ダウンロード数などいろいろな指標が考えられる。ジャーナルインパクトファクター（JIF）は質ではなく人気の高さを指すものなので、指標としては好ましくない。また編集委員に特定の国の出身者が多い場合は、問題として考慮すべきである。

◆投稿規定の改定の周知は、どう行うのがよいでしょうか。

欧米の学協会では SNS を頻繁に利用している。各種チャンネルを活用し、海外の著者も知り得るようにジャーナルの Web サイト（英語）での発信は有効である。プレスリリースや学協会の Web サイト、J-STAGE での発信もいだろう。

◆日本のジャーナルの印象、課題を教えてください。

日本のジャーナルの基準は大変高く、JIF の高いジャーナルもある。課題は、海外の著者とのコミュニケーションだ。海外の著者は、ジャーナルや資料の言語が英語かどうかだけではなく、英語における表現等も判断材料としている。

◆今後についての考えをお聞かせください。

これまでのジャーナルコンサルの取り組みで日本の学協会の法的・財政的な課題が理解できたので、今後、幅広く学協会に支援を広げていきたい。



McGlashan 氏の講演

学協会(下記)から、ジャーナルコンサルの実施結果とコンサルティングを受けてよかったことなどの報告がありました。

- (3) 日本薬学会学術誌(BPB) の質向上に向けた取組/公益社団法人 日本薬学会 BPB 編集長 大槻 純男氏
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar03.pdf
- (4) 学会英文誌のオープンアクセス化に向けて ～(公社)日本水環境学会の取り組み～/公益社団法人 日本水環境学会 理事、OA化タスクフォース長 佐藤 弘泰氏
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar04.pdf
- (5) オンライン英文機関誌による国際情報発信の試み ～国際的データベース収載に向けて～/公益社団法人 日本リハビリテーション医学会 国際誌編集委員会 委員長 小山 哲男氏
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar05.pdf
- (6) プロテオーム研究のデータジャーナル Journal of Proteome Data and Methods 創刊に向けて/日本プロテオーム学会 広報担当理事 河野 信氏
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar06.pdf
- (7) J-STAGE 2018 年度取組・2019 年度予定/JST
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_20190315_Seminar07.pdf

<全体の質疑・応答>

- ◆オープンアクセス (OA) や Creative Commons (CC) ライセンスに対する理解を、理事会等からどう得ましたか。
- ・編集委員会と事務局の関係が密であったため、スムーズに情報共有ができた。委員会で十分に議論してから理事会に諮った。(日本薬学会)
 - ・「OA とは何か」「CC ライセンスとは何か」から理事会で説明した。OA を導入し始めていた関連学会を参考に資料を作成したので、理事会も理解しやすかったと思う。(日本水環境学会)
 - ・単独で進めてきたので、理事への説明が後手後手になってしまった。しかし理事が OA や CC ライセンスに理解があったのですぐに賛同を得られた。(日本プロテオーム学会)
- ◆今後ジャーナルコンサルを受ける学協会へ、アドバイスをお願いします。
- ・学会内にジャーナルコンサルに対応する専門組織を作った後は、課題への対処が早くなった。タスクフォースをまず立ち上げるとよい。(日本水環境学会)
 - ・反省点は、理事会とのコミュニケーションが遅かったことで、スムーズに運ばなかったこと。編集委員や理事会のメンバーと早い段階から関係を築き、関係者を巻き込んでネットワークを作ることをおすすめする。(日本リハビリテーション医学会)

McGlashan 氏、学協会の皆さま、ありがとうございました。

今後も JST はジャーナルのプレゼンス向上に取り組んでまいります。

2019 年度の J-STAGE セミナーは、年間テーマを「国際動向への対応」と定め、オープンアクセス、出版倫理に焦点を当てた情報を提供する予定です。

6月21日に開催した、「2019年度 第1回 J-STAGE セミナー」の報告を本誌8ページに掲載しましたのでご覧ください。



2018 年度 第3回 J-STAGE セミナーの様子



【シリーズ学会訪問】 ～日本細胞生物学会～

日本細胞生物学会英文誌「Cell Structure and Function (CSF)」(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/csf/-char/ja>) の編集委員長・吉田 秀郎兵庫県立大学大学院生命理学研究科教授に国際発信の取り組み等について話を伺いました。

吉田先生は2019年1月にCSF誌の編集委員長に着任されました。吉田先生がすべての論文をCSF誌に投稿していたら、いつの間にか編集委員長に選ばれてしまったそうです。J-STAGEと日本細胞生物学会との関係は古く、2008年から2011年にかけて中野 明彦前編集委員長に当時のJ-STAGE アドバイザー委員会委員長を務めていただきました。

●貴学会の沿革とCSF誌の特徴、国際発信の取り組みについてお聞かせください。

本学会は、1950年に日本細胞化学会として発足、1964年に日本細胞生物学会に改称、現在に至っています。生命の基本である細胞について研究する研究者の団体で、細胞生物学分野の研究成果の公開、情報共有を行うことで、細胞生物学の発展に貢献することおよび若手研究者の育成を目的としています。

CSF誌は1975年に創刊、2005年に電子ジャーナル化を行い、2018年にGold Open Access誌となりました。国内の学会員のみならず、海外からの投稿も多く、100人以上のAssociate Editorをそろえており、ScholarOne Manuscripts (オンライン投稿・査読システム) を使っているので投稿受付から出版までがとても早いのが特徴です。最新(2018年)のジャーナルインパクトファクターは3.500です。インド・イタリア・米国などの国際学会での広報活動や良質の論文(特に総説)を掲載することにより国際発信力の強化を図っています。



吉田編集委員長

●J-STAGEを利用されたきっかけ、およびJ-STAGEに期待されていることは何でしょうか。

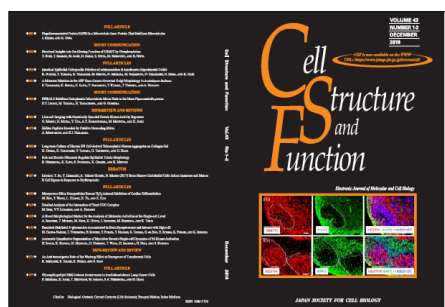
2005年当時、学会員が減少したことや、大会を大学などではなく公共の施設で行うようになったことから学会の財政が悪化しました。冊子体の学会誌を発行する財政的余裕が失われたため廃刊も覚悟していましたが、J-STAGEへの登載により電子化することで刊行を継続することができました。現在もJ-STAGEなくしては刊行を継続できない状態です。

J-STAGEのサービスには満足しており大変感謝しています。期待する点としては、資料トップのデザインをジャーナルごとにもう少し自由に変えることができればよいと思います。また、J-STAGEニュースなどいろいろな情報を適宜、メールで配信していただけると非常にありがたいです。

●日本の学協会のジャーナルが海外の出版社へ移っていく状況をどうお考えですか。

学会によって学会誌の位置付けが異なるので一般論は難しいですが、海外の大手商業出版社へ移ればパッケージ販売等で学会の財政状況はよくなるメリットがあるとしても、オープンアクセスにできないことや海外商業出版社が手を引いたらどうなるのか、などの課題があり、本誌は海外への移行は考えていません。また、海外商業出版社は投稿論文を簡単にリジェクトしますが、われわれはそのような論文の投稿者に対してもっと丁寧にサポートしたいと考えています。ジャーナルの運営を100%学会がコントロールしたいのであれば、またオープンアクセスにこだわるのであれば、やはりJ-STAGEがよいと思います。

●貴学会の今後の方針(抱負)を教えてください。



Cell Structure and Function 誌

質のよい論文を増やす、他学会との連携(大会との連携)および会員との連携、そして若手研究者との連携を推進していきたいです。お互いの顔が見えない巨大会をを目指すのではなく、互いに密なコミュニケーションが取れる小回りの利く学会を目指します。若手研究者をさまざまな方策で育成すること、および若手とシニア研究者が密にコミュニケーションを取ることができる学会にしていきたいと考えています。

日本の基礎科学分野にもっと光が当たるようにCSF誌と心中する覚悟のある編集長でないと、雑誌はよくならないと思います。J-STAGEがなくなると、CSF誌の出版は維持できなくなり、小職の論文もすべて読めなくなってしまうので今後も無償でサービス提供を続けてほしいと思っています。また、日本のみでなくアジアのJ-STAGEとなつてほしいと願っています。

ありがとうございました。J-STAGEもオープンアクセス支援に努めてまいります。



【シリーズ学会訪問】 ～日本動脈硬化学会～

日本動脈硬化学会雑誌「Journal of Atherosclerosis and Thrombosis (JAT)」(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jat/-char/ja>)の編集委員長・浅田 祐士郎宮崎大学教授と水上 茂治学会事務局長にお話を伺いました。浅田先生は宮崎大学の医学部病理学教授で大学院医学獣医学研究科科長であり、2014年から編集委員長に就任され、他関連学会誌の編集委員も務められています。

●貴学会の沿革、JAT 誌についてお聞かせください。

本学会は1974年に発足し、動脈硬化に関する基礎・臨床の分野のみならず、栄養、統計、農学等多岐にわたる分野の人々が集まり、動脈硬化の成因を探るとともに、その予防、治療をどうやって進めていくかを研究することを目的としています。

JAT 誌はオープンアクセス (OA) 誌で2017年にはジャーナルインパクトファクター (JIF)が3を超えました(2018年のJIFは3.478)。投稿数は増加していますが、編集委員と事務局の協働により投稿論文の受付からfirst decisionまで平均17日を保っています。また総説は新進気鋭の研究者に依頼するようしており、引用数も増えてきています。2010年に紙媒体を廃止、2013年にAPSAVD (Asian-Pacific Society of Atherosclerosis and Vascular Disease)のofficial journalになり、2016年からはPMC (PubMed Central)にXML登載をしています。国際発信への取り組みとしては、海外で開催される学術集会等で積極的にプロモーション活動を行っています。



浅田編集委員長

●J-STAGEのよい点、不満な点、期待することは何でしょうか。

J-STAGEは2004年から公開を開始し、2011年にはJSTのJournal@rchive事業で過去論文の掲載をしていただきました。無料で利用できる点がなんといってもありがたいところです。情報の検索の際はPubMedから入り、J-STAGEのTOPページから探ることはほとんどないため、システム的に不満なところは特にありません。

期待する点としては、各論文のアクセス・ダウンロード数のリアルタイムな提供を望みます。また、JAT誌がもっと多くの海外読者に閲覧されるような仕組み、DOAJなどに掲載されるための支援(最新情報の提供、情報分析など)があるとよいです。システムや専門用語に詳しくない利用者にも理解できるような情報発信を望みます。

●OAにされた経緯と、その効果についてお話しください。

JAT掲載論文の利用に対する萎縮効果を減らし流通を促進すること、および事務作業の効率化を目的としてCCライセンス(CC BY-NC-SA)表記を実施しました。これにより利用許諾範囲を明確にでき、機関リポジトリの申請承認を研究機関から得る必要がなくなりました。また、JAT掲載論文の日本語訳を転載する際の申請に関する業務も効率化できました。なお、JIFが向上した一因には、OAとしたこともあると思います。



Journal of Atherosclerosis and Thrombosis 誌

●最近の学協会を巡る情勢についていかがお考えでしょうか。

これまでに海外出版社からの勧誘は度々きています。専門の出版社に委託すれば効率的な編集作業になると思いますが、学会内での手作りのよさを大切にしたいと思っています。学会誌の編集にかかる学会事務局、編集委員会のモチベーションは現在、非常に高く、これを維持したいと考えます。現時点でJ-STAGEから移るようなことは想定していませんが、今後、会員数や投稿論文数が増えて現事務局内で手に負えない場合には検討せざるを得なくなるかもしれません。そのときはJ-STAGEにとどまれるよう出版社が行っているようなサポートもお願いしたいところです。

●貴学会の今後の方針(抱負)について教えてください。

ここ数年、中国からの投稿が増え、日本の研究者の投稿の割合が減少しています。研究者の数が減少している状況なので、日本の基礎研究に関わる研究者の育成に取り組んでいきたいです。また、欧米からの投稿を増やすことも課題です。2021年10月に京都で国際動脈硬化学会の学術集会(ISA 2021)が開催されるので、これを機にさらにJAT誌の国際化と質の向上を目指していきたいと考えています。

ありがとうございました。J-STAGEも幅広い支援ができるよう努力してまいります。

J-STAGE 利用者インタビュー 「神田外語大学附属図書館」

J-STAGE 一般利用者の声を紹介するシリーズとして、神田外語大学附属図書館の吉野 知義課長と雑誌担当の田之上 あかり氏にお話を伺いました。J-STAGE は自然科学系に比べて人文社会系の掲載誌はまだまだ少ないですが、NII-ELS (電子図書館) 収録誌の J-STAGE への移管がほぼ完了したこの機会に、大学図書館に J-STAGE についてお聞きしました。

◆貴図書館の特色、アピールポイントは何でしょうか。

本図書館は、蔵書数約 16 万 6,000 冊、年間入館者数約 13.3 万人の中規模クラスの大学附属図書館です。企画展示エリアでの展示や配架を工夫した指定図書コーナー、ディスカッションのできる Coworking space の設置、Twitter や Facebook による利用者とのコミュニケーションなどが特色です。本年度からは、キャンパス全体に導入したデジタル・サイネージで学内の最新情報をリアルタイムに提供しており、この管理・運営を、情報の収集・整理・提供の専門部署ということで本図書館が担当しています。このような業務を図書館が担当するというのは他大学ではみられないと思います。また、大学としては、「[THE 大学インパクトランキング 2019](#)」SDG4(質の高い教育をみんなに)において本学が日本で 1 位になりました。



神田外語大学附属図書館全景

◆吉野課長の経歴と現在の立場についてご説明ください。



吉野課長 (左) と田之上氏 (雑誌担当)

私は、武蔵工業大学(現東京都市大学)図書館、丸善株式会社を経て現在の職に就いています。J-STAGE とは古くからお付き合いがあり、丸善時代には J-STAGE について JST の方とよくお話をさせていただきました。2012 年から本図書館の課長を務めています。

◆貴図書館における学術論文の検索・利用の状況はいかがでしょう。

論文・雑誌記事の探索手法として CiNii Articles、EBSCO Academic Search Elite、JSTOR、KISS などを図書館ホームページで案内しています。J-STAGE の掲載論文(全文情報)はすべて CiNii Articles で検索することができるので、そこからたどるのが一番多いようです。購読誌が J-STAGE に掲載されているので、雑誌や著者を特定して全文を見たい場合やブラウジング的に雑誌を探したい場合は J-STAGE の TOP から閲覧することもあると思います。

◆J-STAGE の使いやすさや機能面は、以前と比べてどうでしょうか。

J-STAGE2(2004 年～)から知っていますが、J-STAGE3(2012 年～)になり、さらに 2017 年のインターフェースの改善により、かなり見やすく使い勝手がよくなったと感じています。他のシステムと比べても遜色ないと思います。

◆NII-ELS 事業の終了に伴い収録誌を J-STAGE へ移管しましたが、何か変化はありましたか。

検索の多くは CiNii Articles から入りますので正直、利用者からみればその先の本文データがどこにあっても影響はありません。ただ、ELS データを J-STAGE に移管していただけたからこそ不便にならなかったのも、とてもありがたく感じます。

◆日本の大学図書館を巡る最近の情勢についてどうお考えですか。

どこの図書館でも同様ですが、本図書館でも 20 年くらい前から海外出版社によるジャーナル購読料の高騰・寡占化による影響を受けており、この状況はどうしようもないところまできているのではないのでしょうか。JST のような公的機関が、解決に向けて指揮を執っていただけたらと思います。

◆最後に、J-STAGE に期待することはありますか。

Google のように自由言語で簡単に検索できる機能があるとよいと思います。また、人文社会系の方は J-STAGE を知っていても自然科学系のデータベースと感じている人が多いのではないかと思いますので、書誌情報のみの提供も検討されてはと思います。J-STAGE が 2 次情報も含め網羅性を高めれば、もっと検索するようになるのではないのでしょうか。最後に、国産ジャーナルが海外でもより利用されるよう、有料販売も含め促進できるとよいと思います。

ありがとうございました。大学図書館でももっと使いやすく利用できるよう頑張ります。

WSIS Forum 2019 参加報告

2019年4月8日～12日、スイス・ジュネーブにおいて世界情報社会サミットフォーラム(WSIS* Forum 2019)が開催され、150以上の国・地域から3,000人を超える参加者が出席しました。J-STAGEはUNESCOからの招聘により、UNESCOが企画したセッション「Access to Scientific Information」(8日)にパネリストとして出席し、日本の大学や資金配分機関におけるオープンアクセスに対するポリシーの整備状況や日本のジャーナルが有する今後の課題等について発表を行いました。

※WSIS: World Summit on the Information Society. WSIS Forumは、情報社会の発展について、さまざまなステークホルダーが情報交換・知識創出・ベストプラクティスの共有を行う場として、ITU、UNESCO、UNDP、UNCTADが共同開催するフォーラムです。



WSISのセッション "Access to Scientific Information"登壇者

本セッション開催の背景には、商業出版社による学術論文出版の寡占と、これを一因とした学術論文流通の世界的な格差(国の経済力の違いによる論文へのアクセス性の格差等)という問題があります。これらの問題に対して関係者間での議論やUNESCOによる解決に向けた取り組みが行われてきた中で、商業出版社によらない各国ジャーナルプラットフォームが連携するアライアンス構想(Global Alliance of Open Access Scholarly Communication Platforms、GLOALL)がもちあがり、今回のWSIS Forum 2019のセッションとして、UNESCO主催の下に議論の場が設けられました。

初めにUNESCOからGLOALLおよび本セッションの趣旨が説明された後、招聘された各プラットフォーム—AmeliCA(南米)、AJOL(アフリカ)、Érudit(カナダ)、J-STAGE(日本)、OpenEdition(フランス)、SciELO(ブラジル)—がそれぞれの取り組み状況およびGLOALLへの貢献の可能性について講演しました。その後のパネルディスカッションでは、GLOALLの基本的な理念・体制、財政的な持続性、提供価値等について議論が行われ、多様な文化・テーマ・言語的アプローチの下、科学的知識の民主化のために協力することに合意しました。これを受けて発足したGLOALLでは、科学のおよび学術的知識が国連のSDGs(持続可能な開発目標)の達成に不可欠な世界的な公共財であるという原則を共有し、多言語学術コミュニケーションに関わる規範、製品およびサービスの開発も促進し、世界の研究との相互運用性の強化を図る予定です。

GLOALLの結成を受け、わが国においても、国内ジャーナルのオープン性や、和文論文の国際的なアクセス性等の現況に対する変革が起こることを期待しています。J-STAGEは、GLOALL等の国際的なイニシアチブを通じ、オープンアクセスに関わる国際動向に対応していくとともに、J-STAGEセミナーやジャーナルコンサルティング等による国内ジャーナルのオープンアクセス推進に向けた支援や、科学のおよび学術的知識の流通基盤を強化してまいります。利用機関の皆さまにおかれましては、こうした取り組みにご協力いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

<GLOALL 参加プラットフォーム>

AmeliCA : <http://www.amelica.org/>

AJOL : <https://www.ajol.info/index.php>

Érudit : <https://www.erudit.org/en/#>

OpenEdition : <https://www.openedition.org/>

SciELO : <http://www.scielo.br/>

【来訪者紹介】figshare、AIP Publishing、紀伊國屋書店

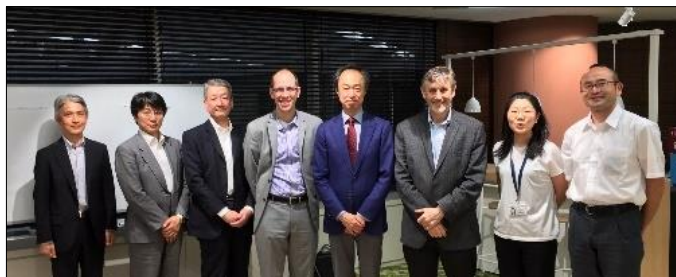
J-STAGE では、出版社、プラットフォーム、テクノロジープロバイダといった、学術コミュニケーションに関する海外機関から来訪者をお迎えし、意見交換等を行っています。本欄では、随時来訪者を紹介いたします。

◆2019年5月 figshare (Digital Science 社)



Dr. Mark Hahnel (figshare 創設者 兼 CEO、右)
小賀坂 康志 (JST 情報基盤事業部長)

◆2019年6月 AIP Publishing・紀伊國屋書店



Dr. John S. Haynes (AIP Publishing CEO、右から3人目)
十河 宏氏 (紀伊國屋書店 取締役、左から3人目)

【2019年度 第1回 J-STAGE セミナー報告】 ～国際動向への対応：オープンアクセス(Plan S)～

2019年6月21日、2019年度第1回となるJ-STAGE セミナーを開催し、111名の参加がありました。

本年度のセミナーは、昨今、ジャーナル出版に関する国際動向が活発であること、また国際的に通用するジャーナルであるためには、ジャーナル出版に関する国際動向を把握し、それにならった対応が必要であることから、年間テーマを「国際動向への対応」と定め、オープンアクセス、出版倫理に焦点を当てた情報を提供する予定です。

第1回セミナーのテーマは、「国際動向への対応：オープンアクセス (Plan S*)」です。初めに、学術ジャーナルを専門とするコンサルタント会社であるINLEXIO社のDugald McGlashan氏より、オープンアクセスに関する国際動向を概観したうえで、欧州を中心に取り組みが進められている「Plan S」が求める要件や、学協会発行ジャーナルへの影響および対応方法について解説が行われました。続いて、クラリベイト・アナリティクス社 野村 紀匡氏より、Plan Sを策定したコンソーシアムであるcOAlition Sから助成を受けた研究成果論文の分析結果を紹介いただきました。

※cOAlition Sが策定した、公的資金による研究論文の即時オープンアクセスを実現する方法をまとめた計画



盛会だった、2019年度 第1回 J-STAGE セミナー

次いで、JSTが、国内の助成・研究機関におけるオープンアクセス方針の策定状況、Plan Sの要件の一部であるDOAJやCreative Commons (CC) ライセンスの概要およびJ-STAGE 掲載誌の対応状況等を示しました。最後に、DOAJ 収載やCC ライセンス設定をすでに実施している日本表面真空学会 松田 巖氏および水文・水資源学会 田中丸 治哉氏から、これらへの取り組みについて、学会・発行誌の概要とともにお話しいただきました。

参加者からは、「オープンアクセスに関する基本的な知識を得られた」「自ジャーナルのオープンアクセス実現の参考にしたい」等の

感想をいただきました。

当日の講演の様子はJ-STAGE 公式 Twitter で実況し、「モーメント」にまとめていますので、ぜひご覧ください。講演資料は、J-STAGE Web サイトで公開中 (2019年6月開催 J-STAGE セミナー関連資料) です。次回のJ-STAGE セミナーは出版倫理に焦点を当て、10月21日に開催 (予定) いたします。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

・J-STAGE Twitter : https://twitter.com/jstage_ej

・Twitter モーメント「2019年度第1回J-STAGE セミナー」: <https://twitter.com/i/moments/1142984030767308800>

・2019年6月開催 J-STAGE セミナー関連資料: <https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB4/PastIssues/-char/ja/#1907/05>



ご存じですか？ J-STAGE おすすめ機能紹介

学協会の皆さま、J-STAGEの機能を十分に使いこなしていらっしゃいますか？

たとえば「この資料について」の画面では、資料(刊行物)の概要説明はもちろん、顔写真やプロフィール付きの編集委員紹介、編集長からのメッセージなど、さまざまな方法で資料をアピールできます。そのほか「資料トップ」画面に掲載できるおすすめ記事、学協会からの最新情報の発信に最適な「ウィジェットエリア」など、閲覧者にも便利な機能が搭載されています。おすすめ機能をいくつか紹介しますので、貴誌の魅力発信にぜひご活用ください。

「この資料について」画面

学術誌の歴史について

日本薬学会は、1880年に創立された、我が国では歴史ある学会の一つです。現在、約18000人の会員を擁しており、毎月3誌の学術誌を刊行しております。英文による学術誌の一つとして「*Chemical and Pharmaceutical Bulletin*」(Chem. Pharm. Bull.)は、1953年にPharmaceutical Bulletinとして創刊され、その後Chem. Pharm. Bull. と名称を変え、薬学と健康科学に関する化学分野をカバーしています。二つ目として、「*Biological and Pharmaceutical Bulletin*」(Biol. Pharm. Bull.)があり、これは1978年に創刊されたJournal Pharmacobio-Dynamicsを起源としており、更に1953年に創刊され、2012年に内容を引き継いだJournal of Health Scienceの後継誌として、薬学と健康科学に関する生物学分野を領域としています。英文と和文両方にて構成される学術誌として、「YAKUGAKU ZASSHI」(薬学雑誌)があり、本学術誌は学会創立の最も長い歴史を有しています。薬学雑誌では、和文による原著論文・総説等のほか、臨床薬学領域研究については英文による投稿も受け付けています。日本薬学会におけるこれら学術誌のスコープは、基礎研究から臨床研究に至る幅広い分野に渡りますが、いずれも薬学・健康科学をベースとしています。3誌に投稿された論文の平均審査期間は、現在、投稿された方へ最初の判定を通知するまでに約1か月ですが、更なる時間短縮を目指しています。3誌ともにJ-STAGEにて無料公開しており、研究成果を世に広める一助となることを期待しております。皆様の研究成果をChem. Pharm. Bull.やBiol. Pharm. Bull.、薬学雑誌へ積極的にご投稿下さいませよう、よろしくお願い申し上げます。

学術誌編集委員長
細谷 健一
富山大学大学院

公益社団法人 日本薬学会  が発行

編集委員会



中島 誠
Editor-in-Chief
熊本大学大学院

Chemical and Pharmaceutical Bulletin (Chem. Pharm. Bull.) は、日本薬学会から刊行される国際学術誌の1つで、総説 (Reviews)、カレントトピックス (Current Topics)、速報 (Communications)、一般論文 (Regular Articles) とノート (Notes) を掲載する一次情報誌として、毎月1回雑誌を発行するとともに、全ての論文をオンラインで無料公開しています。Chem. Pharm. Bull. 誌は、緊急かつ重要な研究結果をすべての読者と共有するため、創造的な戦略や斬新なアイデアを含む最先端の研究成果を発表するよう努めています。また、本誌は薬科学(薬学と健康科学)に関する境界領域を含めた化学系全般にわたる研究成果の掲載を奨励しています。主に扱う研究領域は以下の通りです。
有機化学、医薬化学、ケミカルバイオロジー、インシリコ科学、分析化学、物理化学、無機化学、物理薬理学、製剤工学、生薬学、天然物化学。



大槻 純男
Section Editor-in-Chief
熊本大学大学院



賀川 義之
Section Editor-in-Chief
静岡県立大学



深水 啓朗
Section Editor-in-Chief
明治薬科大学



学協会の歴史、資料(刊行物)の沿革、編集委員長からのメッセージほかを掲載できます。

更新は、随時可能です。




編集委員の名前・所属・顔写真、さらにメッセージ等も表示できます。

資料(刊行物)の研究分野や領域を、より具体的にイメージできます。

※ 日本薬学会「*Chemical and Pharmaceutical Bulletin*」より

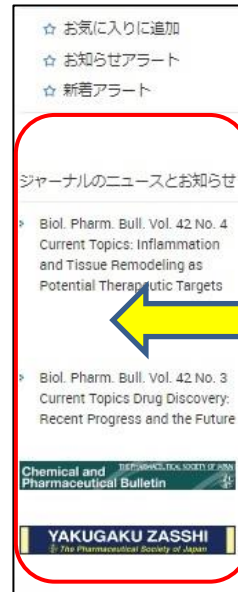
「資料トップ」画面




 **おすすめ記事を最大5件まで表示できます。**
図表の表示や、編集者のコメントの掲載も可能です。

※ 日本心理学会「心理学研究」より

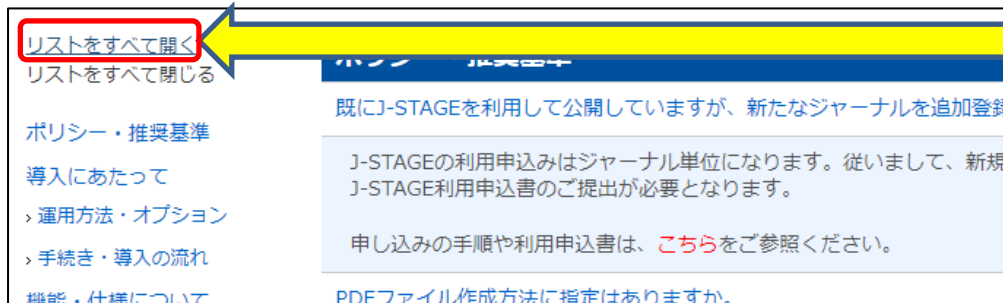
「ウィジェットエリア」(資料トップ、この資料について、書誌ページの右サイドに位置)





 **・次号予告、ニュース、お知らせ**
・投稿受付
・関連資料、関連情報、ダウンロードファイル
・リンクバナー
などを表示できます。
 ※資料トップ、この資料について、書誌ページにおける表示/非表示を設定可能。

※ 日本薬学会「Biological and Pharmaceutical Bulletin」より

番外！ わからないことがあったら、FAQへ



 **＜おすすめ検索方法＞**
「リストをすべて開く」(左図の赤囲み)をクリックし、回答を全て開く。

検索ボックス(Ctrl + F)を利用して検索。

そのほかにも、貴誌の魅力を引き出せる J-STAGE の機能があります。以下を参照ください。

- ・ J-STAGE 画面リニューアルについて：https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/jstagenewif_releasenote.pdf
- ・ J-STAGE_操作マニュアル サイト編集ツール編：
[https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/jstage_sousa\(saitohenshu\).pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/jstage_sousa(saitohenshu).pdf)

2つの Twitter を、ぜひフォローしてください！
 ◆JST 公式 Twitter (@JST_info) https://twitter.com/JST_info
 プレスリリース・募集案内・イベント情報などをお届けします。
 ◆J-STAGE 公式 Twitter (@jstage_ej) https://twitter.com/jstage_ej
 メンテナンス・プレスリリース・イベント情報などをお届けします。

J-STAGE ニュース No. 41 2019年7月12日発行
 編集 : 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 情報基盤事業部 研究成果情報グループ
 発行人 : 情報基盤事業部長 小賀坂康志
 〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイェンスプラザ
 電話 : 03-5214-8837(ダイヤルイン)
 E-MAIL : contact@jstage.jst.go.jp